

## [031]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7434526>

---

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 31, 2026-03-15. Seminar of Educational Sociology  
Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



## 三者面談における教師の役割に関する研究

### —教師の語り分析から見る三者面談の現状—

キーワード：三者面談、進路相談、進路指導

九州大学教育学部

蔭木 美優

#### 4. 目次

##### 序章

###### 第1節 問題の所在

—日本の高等学校の進路指導の変遷と現状—

###### 第2節 先行研究の整理

—現在の三者面談の目的と教師の役割—

###### 第1項 進路相談としての三者面談

###### 第2項 学校と家庭との連携のための三者面談

###### 第3項 三者面談の現状

###### 第3節 本研究の課題

###### 第4節 本研究の仮説

###### 第5節 データの概要

###### 第6節 本論文の構成

#### 第1章 三者面談の位置づけ

##### 第1節 親に着目する三者面談

##### 第2節 子どもに着目する三者面談

##### 第3節 親子に着目する三者面談

##### 第4節 小括

#### 第2章 三者面談の課題

##### 第1節 進路決定・進路実現のための指導

##### 第2節 親の学校・教師への不安・不信感

##### 第3節 親子間のコミュニケーション不足

##### 第4節 小括

#### 第3章 三者面談のスキル・能力

##### 第1節 コミュニケーション能力

##### 第2節 知識

##### 第3節 個人のスキル・能力以外で不足していること

##### 第4節 小括

#### 終章

##### 第1節 本研究の成果

##### 第2節 今後の課題

#### 5. 概要

第二次世界大戦後、アメリカの指導の下で、民主主義の原理に立った教育改革が行われた。(吉田・篠、2007、p14) 進路指導もそれに伴って改革が進められ、現代に至るまで大小さまざまな改革があった(吉田・篠、2007、p14)。戦後から現代の進路指導は、大きく1947年から1957年までの「職業指導」と、1958年から2003年までの「進路指導」、2004年以降の「キャリア教育」に分けられる(吉田・篠、2007、p15-19)。時代に即して進路指導が行われる中で、その一環として、三者面談も時代とともに変化しながら実施されている。

進路指導の中で行われる面談は進路相談と呼ばれ、通常は個々の子どもと教師が面談することによって、子どもの進路に関する問題や悩みの解決を始めとして、子どもの自己理解・情報理解の深化、適切な進路決定など、望ましい進路発達に援助しようとするものである(吉田・篠、2007、p61)。また、家庭との連携の手段として三者面談があり、高等学校卒業後の進路に関して重要なキャリア・カウンセリングの場となる(文部科学省、2011、p98)。それは同時に、学校からの情報提供による共通理解の構築のためにも行われる(文部科学省、2011、p98)。すなわち、子どもを主体とする進路相談としての三者面談と、親を主体とする三者面談が好ましいとされ、行われていると考えられる。

しかし、自己選抜(子ども自身が適性や選抜基準に沿った選択をすること)が十分にできている子どもにとって面談は激励の場となり、一方で自己選抜が不十分な子どもには説得の場であり、時には希望を諦めさせて、それを慰める場でもある(荻谷、1991、p107-111) こともある。これは、教師は子どもが主体的に進路決定をする

ことを尊重する指針を持つ一方で、学校内で就職先の推薦を決定するプロセスがあるため、教師が子どもの選抜を行わなければならないからである（荻谷、1991、p96-97）。

以上を踏まえて本研究では、「教師が実際に行っている三者面談はどのような目的で行われているのか、そこで教師はどのような役割を担っているのか、またはどのような役割を担うべきと考えているのか」を明らかにすることを課題とした。そして、先行研究では明らかとなっていない、高卒就職以外も含めた進路指導での一般的な三者面談について明らかにすることと下。そこで、本研究では、実際に三者面談を行っている、進学校又は困難校に勤務経験のある教師2名ずつ、計4名を対象とし、1対1の半構造化インタビューを行った。

まず第一章では、教師がどのような目的で三者面談を行っているのかを明らかにした。先行研究で述べられていたとおり、子どもの意見を聞きとり、それに合わせた情報提供などの指導を行うという、子どもを中心とする進路相談としての三者面談や、親のニーズをくみ取るという、親を中心とする家庭との連携としての三者面談が行われている。そして、意見や意思を相互確認させたり、コミュニケーションをとらせたり、親子へのアプローチとして三者面談を行っていることが新たに分かった。また、どのような目的で三者面談を行っていたとしても、進路選択や進路決定において子どもの意見や意思を尊重するという指導の方針はどの教師も共通していることが分かった。

そして、第二章では、現状の三者面談の課題を明らかにした。インタビューで挙げられた課題は3つあった。まず、進路決定・進路実現のための指導が不十分であることに問題意識を持っていた。これは、三者面談だけでなく、全体的な進路指導が不十分であることや教師自身の考えと生徒の考えが一致していないことに起因する。次に挙げられた課題は、親が学校や教師に対して不安や不信感を抱いていることであった。また、教師はこの課題について、教師の経験が浅いことや学校に対する先入観によるものであると考えている。そして、親子間のコミュニケーション不足も課題であった。親とコミュニケーションをとるように普段から子どもに指導したり、三者面談を親子のコミュニケーションの場として提供したりするなど、教師それぞれが様々な方法で課題を解決しようとしていることが分かった。

第三章では、三者面談に必要なスキルや能力について明らかにした。子どもや親の意見を聞き出したり、親子

の意見を調整したりするための、コミュニケーション能力が必要であること、多様な進路選択や進路実現に対応するために、進路に関する幅広い情報や知識が必要であることが、必要なスキル・能力として挙げられた。そして、教師は、子どもや親に進路の情報を提供することが非常に重要であると考えていること、この考えは勤務校の校風や在籍生徒の特長、選択する進路に関わらず同じであることを明らかにした。また、模試やインターンなどの進路先を知るための体験活動など、教師個人ではなく、学校単位で進路指導を全体的に充実させることが三者面談を充実させることに繋がると、考えていることが分かった。

これらの結果は、実際に三者面談を行っている教員にインタビューを行ったからこそ得ることができた。また、進学校と困難校における三者面談を比較することで、三者面談の目的や教師の役割についてより深く検討することができた。以上のことから、三者面談の役割や教師の役割について教師目線での現状を明らかにした点が本研究のオリジナリティである。

## 6. 主要参考文献

- 荻谷剛彦(1991)、『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム—』、東京大学出版会  
文部科学省(2011)、『高等学校キャリア教育の手引き』、[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/1312816.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1312816.htm)(参照 2025-12-24)  
吉田辰雄・篠翰(2007)、『進路指導・キャリア教育の理論と実践』、日本文化科学社